



# 会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

〒692-0207  
島根県安来市伯太町580  
TEL 0854-23-3346  
FAX 0854-23-3382  
http://www.y-hozon.com/  
E-mail:admin@y-hozon.com

## (仮)安来節会館の名称決定! 応募総数500点の中から選ばれました 安来節演芸館

平成17年度内オープン(予定)に向け、準備が進む安来節演芸館。舞台では安来節を常時公演し、地元産のドジョウ料理が味わえるレストラン棟を設けるなど、安来ならではの特色を活かします。そして、ここに来れば安来節の起源や歴史が一目でわかる展示室が設置されます。今までにご提供いただいた資料は次の通り。いずれも貴重な資料ですが、まだお手元に珍しい資料(特に安来節の古い文献や初代渡部お糸に関する写真・資料など)をお持ちの方も多いと存じます。来館の皆様は安来節を広く知っていただくために、展示用の資料をご提供いただける方は事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い致します。



展示室が設置されます。今までにご提供いただいた資料は次の通り。いずれも貴重な資料ですが、まだお手元に珍しい資料(特に安来節の古い文献や初代渡部お糸に関する写真・資料など)をお持ちの方も多いと存じます。来館の皆様は安来節を広く知っていただくために、展示用の資料をご提供いただける方は事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い致します。

### 寄贈一覧

- レコード
  - 伊藤芳男 (保存会 宍道支部)
  - 中海堂 (荒島町)
  - 渡部唯吉 (安来町)
  - 中本實夫 (保存会 尾高支部)
  - 大和道男 (荒島町)
  - 門脇等玄 (荒島町)
  - 上代茂則 (保存会 大東支部)
  - 但見キ又 (保存会 本部道場)
  - 安達友之 (保存会 本部道場)
  - 野々村 勇 (安来町)
- 蓄音機
  - 中海堂 (荒島町)
  - 中本實夫 (保存会 尾高支部)
  - 上代茂則 (保存会 大東支部)
- 野々村 勇 (安来町)
- 卓せん 三代目出雲愛之助 (保存会 大東支部)
- 書籍
  - 前田勝照 (安来町) 松本興著 「安来節とその起源」
  - 吉本興業 (大阪) 「笑賣往来」復刻版 「ヨシモト」復刻版
  - 曙堂 (千葉) 「遊芸一萬題」ほか
- 高山雅市愛用品一式 山内弘忠 (松江市) (敬称略)

### 上位昇格者

#### — 大師範 — (21名)

- 鼓吹 城市典男 (益田)
- 唄角 木村貞徳 (平田)
- 唄勝部 秀雄 (大社)
- 唄天津 幸子 (宍道)
- 鼓周藤 伏子 (江津)
- 鼓渡辺 武夫 (石見)
- 唄妹尾 恒子 (出雲)
- 絃清山 満智子 (本部道場)
- 踊増田 惣市 (本部道場)
- 絃今岡 淑子 (本部道場)
- 絃小西 英男 (益田)
- 唄福原 光子 (益田)
- 踊小野 利博 (松江)
- 絃丸野 金時 (瑞穂)
- 唄堀内 和代 (米子)
- 絃松岡 里江 (米子)
- 絃池田 正子 (米子)
- 絃石川 弘一 (江田島能美)
- 唄影山 全子 (津山)
- 唄石岡 君代 (松山)

#### — 准名人 — (2名)



安達 幸一  
絃の部 (本部道場)



松浦 保潔  
唄の部 (加茂支部)

平成十七年度の上位昇格者と表彰者が決定しました。准名人には二名の方が、大師範には二十一名の方が昇格され、支部の発展に尽くされた四十五名の方が表彰されることになりました。おめでとうございます。来年度の一月十日の唄い初め会において、免状・表彰状の授与と昇格披露を行います。

### 会員表彰者

(四十五名)

- 吉野和夫 (本部道場)
- 佐伯葉子 (本部道場)
- 飯島布子 (出雲)
- 三宅松四郎 (石見)
- 大井喜代一 (鹿足)
- 日野一夫 (加茂)
- 高橋朝代 (神門)
- 林好朝 (湖陵)
- 栗栖好諭 (江津)
- 勝部哲郎 (宍道)
- 石田キミエ (大社)
- 恩田招次 (大東)
- 大口繁子 (那賀)
- 後野トモ子 (那賀)
- 小早川盛世 (仁多)
- 石井昌子 (浜田中央)
- 酒井実行 (浜田中央)
- 藤原哲郎 (斐川)
- 長廻敏枝 (平田)
- 高見明子 (北陽)
- 野上七子 (益田)
- 澄川福美 (益田)
- 小村頭二 (松江)
- 岡田 榮 (松江)
- 栗末八郎 (瑞穂)
- 松本 剛 (尾高)
- 矢倉美恵子 (尾高)
- 小島一江 (智頭)
- 杉山俊夫 (津ノ井)
- 藤田慶隆 (東伯)
- 河原恒子 (東伯)
- 中野保江 (鳥取)
- 砂口弘子 (法勝寺)
- 安田利子 (米子)
- 吉川信子 (米子)
- 原田芳子 (江田島能美)
- 松田イツキ (江田島能美)
- 平本真理子 (広島玉美)
- 池原数子 (広島東)
- 三宅なをみ (岡山)
- 神田 賢 (津山)
- 杉山 弘子 (津山)
- 南 章恵 (真庭)
- 斉藤弘子 (山口)
- 石岡涼美江 (松山)

## 安来節と鉄の物語

— 正月のこたつ談義 —

並河 健蔵

元々、鉄は冷たく固いものだから、歌謡になじまないと思われながら、人情や労働とを巧みにからませて、面白く楽しい歌詞である。さて歌にうたわれる程の鉄やハガネが、安来の町とどのように関わってきたのか、この地方の経済史の面から調べてみよう。

安来の町は、古くから物資や人々が交流する交易港として栄えてきた。安来十神山鉄ならよから可愛船頭さんに只積まじよこの作詞者は、並河家第十一代三郎兵衛(俳号秀然)であり、奇しくも為替蔵の創設者であった。

安来千軒名の出たところ社日桜に十神山 十神山から沖見れば、いずくの船かは知らねども、滑車のもともて帆を巻いてヤサホヤサホと鉄積んで上のぼる

鉄がうたわれるのは容易にうなずけることだ。前掲の「十神山から沖見れば」の歌が鉄を船積みして出港する千石船の雄姿を歌っていて威勢がよいが、安来の繁栄ぶりをユーモラスに示している。

● 熱い情にハガネも溶ける 溶けて社日の花と咲く ● 恋とハガネはよう似たものよ 焼きよ次第で味が出る ● 十神大橋朝もや晴れりや 安来ハガネの鈍の音 ● 安来千軒名の出たところ 社日桜に十神山 十神山から沖見れば、いずくの船かは知らねども、滑車のもともて帆を巻いてヤサホヤサホと鉄積んで上のぼる

明治時代の中頃には、永盛社という会社が、今の安来市内の木戸川の河口の右岸(東側)近くにあった為替蔵の跡地に設けられて、金融業と倉庫業を営んだ。この地は波止場に隣接して十数棟の倉庫が建てられていて、安来弁でいう「はっこ」な商売ぶりであった。

文政七(一八二四)年に松江藩の直轄による為替蔵なるものが設けられて船荷証券の取扱いは行つたといわれている。現代の金融機関のルーツである。安来の港は、松江藩の領地の中でも、東の要衝であったからだ。ましてや藩の統制下にあったたたら製鉄業が主に奥出雲地方で営まれて、その鉄の多くが安来の港から積み出されて、大いに繁盛したのであるから、安来節に

から、歌詞の時代背景がよく分かる。なお、現在の当主は、第十八代並河勉氏で、安来商工会議所会頭・安来節保存会参加である。 ● 七つ下れば安来馬が戻る 馬の鈴の音足拍手 という歌は「午後四時頃になると、馬を曳くあの人が帰ってくる」という、弾んだ気持ちで待っている恋心がうかがわれる。その馬は奥出雲から鉄を背に積んで港へ戻ってくる馬であるから、当時の町の賑わいを物語っているといつてよい。

時代は藩政の頃から明治に移っても、鉄の商いは益々盛んであった。鉄を運ぶ千石船に代って、西洋型の大きな船が回航し、停泊する日数もふえてくると、安来節が大いにもてはやされることになった。

明治時代の中頃には、永盛社という会社が、今の安来市内の木戸川の河口の右岸(東側)近くにあった為替蔵の跡地に設けられて、金融業と倉庫業を営んだ。この地は波止場に隣接して十数棟の倉庫が建てられていて、安来弁でいう「はっこ」な商売ぶりであった。この永盛社やこれを母体として、明治二十九年に設立された安来銀行の経営資料によって、担保商品の内容を見ると、どの決算期でもその代表的な商品は、鉄と米と生糸であった。





唄 准名人  
小泉 宣明

私は若い頃から民謡に興味があり、ある日ラジオを聞いていたら二代目出雲愛之助先生の安来節教室のようが聞こえて来ました。当時松江市内に住んでいたの、米子町に教室があるのを知り習い始めたのが安来節との出会いでした。気楽な気持ちで通っていましたが、だんだん難しくなり未だに奥の深さに日々勉



鼓 准名人  
矢倉 哲郎

安来節との出会いは「銭太鼓」でした。近くの公民館で銭太鼓教室があり誘われて入会しました。練習を重ねて行くうちに安来節の唄がよく理解できていまいと銭太鼓が打ちにくい事が分かりました。そこで教室の全員が唄を習う事になり安来節保存会に入会しました。昭和五十一年の事です。それ以来二十八年間郷土民謡「安来節」を続けて現在に至っています。

安来節教室(尾高支部崎津同好会)では、指導者に西村功先生を迎え、又後に故中井良夫(名人)先生に永年指導に

# 私と安来節

強をしているところ。昭和三十八年に安来節保存会松江支部がある事を知り入会させて頂きました。支部には三代目富田徳之助先生、初代松尾先生他に大先輩の皆様方がおられて、緊張の連続でした。支部の練習会だけではとても駄目だと思つていたら、三代目富田徳之助先生が唄を教えてやるから来て見なさいと言われしました。当時は毎晩のようにならざるを待つて和多見町の御自宅まで夜遅く迄習いました。先生は大きな声ではなく小さい声でしたが、程の良い味のある唄だった事を覚えています。

来て頂きました。中井先生には唄を中心に指導して頂きましたが、特に「学ぶ者の心得」、「教える者の心得」、又何事にも通用する次の様な「三つの訓」を教えて頂きました。  
一、「守」(まもる)は師の格に至ること  
二、「破」(やぶる)は師の格を變形すること  
三、「離」(はなれる)は師の格から出て己の格を生み出すこと

今は亡き中井良夫先生の「様々な指導」を頭に置きながら芸道に励ませて頂きました。なかなか道はけわしく、とてもむずかしい事ばかりですが高いハードルに向かって進む意欲が大切であると考えています。  
私は今迄に、唄・鼓・絃・銭太鼓に取組んで参りました。特に「鼓」は昭和五十二年当時、私の支部には資格者が一

支部の皆様方には大変お世話になっていましたが、仕事の都合で昭和四十年の春に出雲市に行く事になり神門支部に移籍させて頂きました。神門支部でも先輩の皆様方良い仲間にも恵まれ、好条件の中で切磋琢磨し、技術向上に勉強することが出来ました。安来節は声量いっぱい唄いますから、その人の個性が顕著に表れます。これが安来節の魅力・良さであり難しさでもあります。自分の良い所、個性を生かし唄をつくり上げていきたいものです。お互いに楽しく輪を広げ、安来節保存会の益々の発展をお祈り申し上げます。

## へ空の世界歌声けびひ

### 支 部 情 報



宍道支部長  
石富 頼男

宍道支部は昭和二十四年五十九名の会員で保存会結成なされて居ります。現在七十九名でそれぞれに活躍して居ります。町主催の各種のイベントやそば祭、敬老会のアトラクション、文化祭の発表

会出演、ボランティア活動として町二ヶ所の特老ホームの文化祭と慰安訪問年五、六回、唄、踊、銭太鼓等で賑やかに入所者と共に楽しみながらの出演です。  
我々の住む宍道町の地味は名前の通りおだやかな宍道湖岸に位置して居り、明治、大正時代は広島、仁多、大原の街道と出雲道(現在9号線)との接点で交通の要衝として木材、米、来待地区より切りだす待石の荷物を荷車から船に積替の人員

夫、人足及び船乗客の遊興の宿場町として賑やかな街で、したがって遊芸の世界も栄えて居り今でも其の雰囲気強い所です。  
安来節保存会も其の発足以前、金鈴会という会名で安来節愛好者十四名の集まりが大正八年に発足して居り、会則会員名簿等が保存して居ります。唄之部、三味線之部、つづみ太鼓之部、おどり之部、尺八之部が有った様です。其の当時から今年で八十五年の歴史が有ります。

其の頃の事ですが、三十年代前に七十歳で故人となられた片部為吉という人は、当時加茂に在住の初代出雲愛之助様に師事され(加茂と宍道は近い)芸名出雲小愛之助を頂いて居られた。故人になられた今、芸名の所在を如何様にしたら良いかと今でも時々支部内でも話題に成ります。此の様に町にしみついた金鈴会を伝統として、宍道支部活動に安来節発展に努めたいと思つております。

### 支部創立三十周年



山口支部長  
山口 幸人

まことにありがたい待遇でありました。ようするに裸一貫で炭鉱に来れば、衣食住の心配がまったくなく、衣食住が足りたら、やはり思いは生まれ故郷のことです。鳥根県出身の人は、望郷の念に耐え切れず口を吐いて出てくる唄は、幼いころから聞き覚えた安来節です。炭鉱の社宅のあちこちから聞こえてくる安来節に、たまたま同郷の土が寄り集まり、自然発生的に安来節の会ができました。



大江戸支部長  
森脇 忍

先輩たちから引き継いだ会も、時代とともに変遷を繰り返しました。山口支部の支部長は私で五代目です。山口市や宇部市、小野田市の文化団体にもせっかく根づいた私たちの支部ですから、これからも安来節の演芸で出演し、どんどん新会員の獲得に励みたいと思つています。

花の東京の大江戸支部が、産声あげてはや一年。「安来節」を、もっと、もっと極めたい！と上手になりたい！という想いから自主勉強はもとより、本部から講師の先生方をお迎えしての稽古や、各種のイベント・ボランティア活動に参加し安来節の披露等々、少人数ではありますが心合わせて精進いたしております。

中でも美山たかね先生の若々しい姿、美しい太鼓のバチさばきの素晴らしい、味わい深い唄声には同じ時を過ごせる幸せを感じ、二代目・安達順吉先生とのかけ合いの見事さ、面白さには会場で湧きました。  
二代目・安達順吉先生、足立稔先生の、魂の叫びの様な心の底からの本場の安来節の唄声には皆静まり返り、東西離れていても益々安来節を愛し、広めてゆく努力をすべきと誓つたものです。

創立以来関わって下さり、ご指導頂いております保存会事務局、保存会の諸先生方、会員の諸先輩、会員の皆様、今後共大江戸支部をよろしく申し上げます。

去る十一月十四日には一年間の成果を確かめるべく、発表会を開催しました。安来節名人の二代目・安達順吉先生、准名人の足立稔先生、東京安来節の元祖とも言うべき美山た

ね先生(浅草木馬館にて、五十年近くプロとして活躍)、他民謡界の先生方をお招きしての発表会は見応えのあるものでした。



少年部資格に思う



短い唄でも安来節、長い唄でも安来節、ローカル色豊かな文句を入れても安来節、リズムカルな男踊りの早唄も安来節。こんな万能的な民謡は、おそろしく他に類を見ないのではなからうか。

り、早々と低学年で初段になる子もいる。しかし、そこには絶望的で終わりに似た耐え難いものがあるのではなからうか。高校生までには長いブランクがある。自信はあるからやめたくはないが、学校生活のハードなカリキュラムもあり、同時に肉体的、精神的変化もある。毎年審査を受けて昇級する励みがないと、情熱を持ち続けていくことは難しい。そのため、せっかくの素地を空振りする例がいくつもあり、民謡本来の自由奔放さを失い、そして去っていく。

に民謡の衰退が心配されている中で、慣例にとらわれることなく、過去に何があろうと脱皮する勇氣が必要ではなからうか。芸に年齢も国境もないはず。少年でも、優秀な者は二段、三段と追いつけ追い越せが本来の姿だと思ふ。ただ、師範ということになる種々の形が伴ってくるので、せめて准師範までとし、大人になるのを待つくらいは柔軟性を持っていただければ、会員継続の可能性は一段と大きくなるのではないだろうか。

益田支部事務局長 大石 義富

踊りの源流を求めて「棚田」へ行く



十月九・十日、千葉県鴨川市の大山千枚田の収穫祭に参加した。十月十七日の西部地区師範研修会の折、波佐本夫妻に案内していただき、柿木村の棚田を見学することができた。どちらも日本棚田百選に選ばれている。とりわけ柿木村の棚田は六百年の歴史を持ち、石垣で作られている棚田として注目されている。また、「お助けはんどう」という「かめ」が棚田の

頂上にあり、湯水時に人々の命を救ったと伝えられている。今、村人は「助けはんどうの会」を結成して、オーナー制度も導入し棚田の保存に立ち上がっている。さて、何故棚田かである。それは「米を作る生産の場の外に、保水、洪水調節、土壌浸食防止、両生類、魚類、昆虫、鳥類、哺乳動物など、多様で独自性をもった生態系保全の役割、日本人の原風景としての文化的価値」などなどである。

東京支部長 棚橋 保

会員の声コーナー

私と安来節



私は現在七十四歳です。子供の頃よりなぜか三味線の音色がとても好きでした。小さいのに検番の戸の隙間から覗き見をして注意されたことをよく覚えております。しかし、それも戦争があったり、就職したり、毎日の仕事に追われ、子供の頃の楽しみを忘れていました。五十歳になった時、これからは少しづつでも自分の時間をつくり、子供の頃より好

きだった三味線を習いたいと思ふようになりました。安来節は、平成五年から習い始めましたが、その後震災があり、心の病気が長く続き、その間に心臓の手術もしました。いろいろなことを経て休んでいた稽古を再び始め、現在唄は二段、それ以外三味線・踊りと出来るだけ稽古をしております。なかなか思うように上達致しません。が、とても好きで始めたこと、一歩ずつ進んでいきたいと思っております。毎年四月には昇格試験を受け、何とか皆についていけるよ

大阪支部 小倉 教子

みんなで唄う安来節



「みんなで唄う安来節第二十一回素人安来節コンクール」と「第十二回素人どじょう揃いコンクール」の参加資格は安来市内在住者(安来節保存会員は除く)。各優勝者には保存会長賞の優勝杯、各入賞者に本部道場長賞、出場者には参加賞を贈っている。初心者から熟練者まで幅広いレベルの出場者が、唄やユーモラスなどどじょう揃い等日頃の練習成果を披露した。

友美子さん、二位は大塚町宮田理恵子さん、三位は新十神町山崎不二子さん。踊りの部は、優勝広瀬町湯浅清信さん、二位島田町佐伯正憲さん、三位広瀬町石原雅之さんという結果であった。優勝された方は、歳末助け合い芸能大会に出演されることになっている。特別出演では、大塚保育所の年長組男女十名と能義小学校十二名の生徒による銭太鼓とどじょう揃いの披露があり、盛大な拍手で盛り上がった。また、安来地区の公民館安来節教室の発表並びに本部道場

と自己満足をしていましたが、いざ入会してみると我流との戦いがいましばらく続いたものです。未だに唄は上位を目指しての練習に明け暮れる今日です。これからも私の進む道は、努力の道だと思っております。現在私は、教室の代表者として力不足を恥じながらも、二十数年の歳月を重ねてまいりました。入会時には会員数が二十数名、活気にあふれ楽しいものでしたが今は人数が減り、会員増のため毎月二回町内放送で募集に努めています。収獲なしで悩みの種。でも最近うれしいことに、仁多支部結成以来初めて子供の入会がありました。温かく指導していきたくと思っております。安来節が私に多くの皆様方との出会いの喜びを教えてくれたこと心から感謝しています。

本部道場長 西村 利美

安来節が人と私の架け橋



仁多支部もお陰様で二十数年の歳月が過ぎ、改めて先輩の方々の苦勞に感謝の念を深めています。現在支部には三つの教室があり、その中の横田教室が私の活動の場です。私には、子供の頃から両親の生活の一部のようにして唄われ、子守唄のように聞かされたのが安来節でした。又、当寺安来拳が調子よく酒の場を盛り上げるのを不思議に思ったものです。横田教室では富田先生の指導で、毎月二回の練習を行っています。私は五、六年前に努力の甲斐あって師範をいただくことができました。教室に入る前は、筋はなかなかのものだ

仁多支部 中村 博義

安来節保存会 大江戸支部

「花の大江戸めでた節」 松山絃子作詞  
春夏秋冬めぐる季節に心はずむ  
若いも若きも皆はずむ  
花のお江戸で見たものは  
唄に三味線 銭太鼓

東京都江東区塩浜1-1-13-1317  
TEL 03-3615-0888

安来節保存会 米子支部

歴史と伝統に、先鋭な感性を加え新時代の安来節を提案。米子支部の新しい決意です。唄、絃、鼓、踊、銭太鼓と一緒に楽しみましょう。

鳥取県西伯郡淀江町淀江628-2番地  
TEL 0859-56-3513



平成17年度 安来節保存会

大師範以上研修会開催

今年の大師範以上研修会には、北海道民謡の第一人者であり、現在、日本民謡協会の理事をお務めになつておられる佐々木基晴氏をお迎えし、『民謡と自然』と題して講演をいただきました。



佐々木基晴氏「民謡と自然」

「民謡の大御所」佐々木基晴先生の講話は大変楽しく、精神的にもよい勉強になりました。受講者は大師範以上の方々で、各地で活躍されている先生ですので、講話のとおり、驕り・高ぶりのない心豊かな人ばかりだと思えますが、人間はとく易きに流れることは早く、自分を制するものがなくなるとだんだん自由奔放になり勝ちなものです。

安来節の資格構成は、底辺があつて頂点があり、湖陵支部 岡 信弘

今年の大師範以上研修会には北海道民謡の大御所・佐々木基晴先生がお見えになりました。先生は五歳から歌を始められたと、東北の言葉も地域によつて違いがあること、それにまつわる地域の民謡話、民謡を唄うことによる健康の維持、民謡は今や世界を駆け巡つていよう話。また、組織を活性化させるための大切な道徳の話、後輩に民謡を託していく話等、ほんとに内容の濃いものでした。

指導部員 初田 壽夫

副指導部長 出雲正之助

「やー先生は若い！ 私の第一印象でした。何が若いって年齢もそうですが、話されている内容と表現が若者のようにはずんでいました。講話は、大きく分けて二つあつたと思います。一つは「指導者の役目」、二つは「唄(民謡)の心」であつたと思います。最近民謡ブームは遠のいたと言われます。カラオケや若者の現代音楽のあおりを受けた影響とも言われています。いずれにしても若い人が民謡に接する機会が少ないのです。佐々木先生のご指摘は民謡を若者に植えていくことにあつたと思います。しかし、このテーマを具体的に実行するにはどのような方法があるのでしょうか。この課題を与えられたようです。私は音楽に興味のありそ

うな若い女性に感想を聞いたことがあります。「ボツプスについて」：好きで良く唄っています。「演歌について」：悲しい歌詞が多くてあまり好きではありません。「民謡について」：別の世界でよくわからないのでコメントできません。まーこんな感想を言ってくれました。民謡は小さいときから親しんでいないと、急には好きになるとか親しみを覚えるとか、よほど興味を持つ人でなければいものだと思えます。平成十年十二月十四日、文部省告示で学習指導要領が改正されました。小、中学校の音楽教科に鑑賞教材として「郷土の音楽」などを取り扱うとされています。当保存会としても安来節の普及のために、これを検討する必要があります。

資格審査員 足立 稔

「人として」の話が大部分を占めた講話だったように感じました。唄が上手だから、足が長いから、鼻が高いからといって何も偉くはない。仲間や後輩を大事にし、人の喜ぶことをするのが善意だ。唄を唄うだけでなく、人を楽しくさせる話も大切ではないか。明るく前向きに、プラス志向で生きて行く方が人生を楽しく送れると説かれ、最後は立派な人だったといわれて旅立つた方が、金や財産を残すよりも人として幸せではないだろうか。先生は話題が豊富で、巧みな話術と各地の方言や洒落を交えての講演で、一時間半があつたという間に感じられ、楽しく有意義なときを過ごすことができました。

歌う歌詞の意味は感情を表現するとき非常に大切だと思えます。歌詞を理解しない場合、唄にどうして心が込められるのでしょうか。博多節「百万石の知行取るより」：私もこのように理解してしまいました。先生は「百万石の知行取りより」と訂正されました。私が理解していた歌詞では、女性の気持ちを唄った前後の言葉がつかないことがわかりました。事ほど左様に先生は、気持ちに神仏を拝みて敬い心を清廉に唄(民謡)に心を込めて唄う。心のよりにどこを話されたかと思いました。芸人に年齢を聞くものではないのですが、それをあえて聞きたいし、お話をしたいパワーをいただきたい!! 指導部員 渡部 孝夫

事務局からのお知らせ

平成17年度の安来節全国優勝大会から、銭太鼓の部と熟年部(師範唄のみ)が加わります。資格及び規定は次のとおり。

〈銭太鼓の部〉

- 日時 8月16日(火)
●1ブロック 1チーム
1チーム5名以上で、少年部も含み階級は問わない。(但し、本年度資格審査受審者及び師範既取者に限る)
●歌詞は銭太鼓の歌詞3本で、遅くてもよい。

- 応援の資格は大師範以下(研修会受講者)とし、太鼓も可とする。
●衣裳はチームで揃える。

〈熟年部(師範唄のみ)〉

- 日時 8月17日(水)
●平成17年5月末現在で満70歳以上であること。(但し、70歳に達していても一般の部に出場できる)
その他の事項は、予選会及び優勝大会の開催要項に準じます。

東京上京の折に安来節のご指導をいただける方はご連絡下さい
安来節保存会 東京支部
東京都新宿区西新宿7-7-7
ハイライフ西新宿316号
TEL 03・3361・0488 FAX 03・3361・4293

安来節全国優勝大会
記録ビデオのご注文は!!
1991年~2004年の毎年3日間の競演
高品質な映像 迫力の音質
各¥5,500(送料込み)
VLC 株式会社